新幹線文化財調査事務所調査報告書　第１集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Ⅰ

中田（なかだ）遺跡

専岩（せんごし）遺跡

２０１７

長崎県教育委員会

序　　文

本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書として、平成24年度に実施した中田遺跡・専岩遺跡の調査成果を収録したものです。

中田遺跡・専岩遺跡の調査では、ともに縄文時代から近世にかけての遺物が出土しました。

私たちは、地中に埋もれた先人たちの生活の痕跡を埋蔵文化財と呼びます。その埋蔵文化財を発掘調査することにより当時の暮らしの様子が姿を見せ、人々の知恵や工夫を身近に知ることができます。

これらの埋蔵文化財は、私たちの祖先から受け継いだ貴重な遺産であり、損なうことなく大切に記録・保存し後世へ受け継いでいくことが私たちに課せられた責務であります。

県教育委員会は、これまでも各種開発事業において、協議・調整を重ね文化財保護に尽力してまいりました。

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設事業につきましても、県教育委員会は、建設計画当初より可能な限り保存に努めていただくよう独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構および関係機関との協議を重ねた結果、近辺の遺跡を記録保存する運びとなりました。

発掘調査は、平成23年度から長崎県教育委員会が、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を受け、現在も継続して実施しております。

本書を刊行するにあたり、鉄道建設・運輸施設整備支援機構、発掘調査に携わった方々をはじめ、多大なご尽力・ご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

また、本書を文化財保護ならびに地域の歴史を学ぶ資料として活用していただければ幸いです。

平成29年２月

長崎県教育委員会教育長

池　松　誠　二

例　　言

Ⅰ　本書は、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う中田（なかだ）遺跡・専岩（せんごし）遺跡発掘調査報告書である。調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構より依頼を受け、平成22年度から実施している。平成22年度並びに平成23年度は長崎県埋蔵文化財センターが実施し、平成24年度より長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所を設立し、調査体制の整備を図り本格的に発掘調査を実施した。

Ⅱ　本書には、平成 24 年度の中田遺跡並びに専岩遺跡の調査成果を収録した。

調査組織

長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所	所長	副島　和明
	課長	田尻　清秀
	係長	村川　逸朗
試掘調査担当		
	係長	村川　逸朗
	文化財保護主事	山梨　千晶
緊急発掘調査担当		
	係長	村川　逸朗
	文化財保護主事	山梨　千晶
	文化財調査員	川淵　雅行
整理報告書担当		
	主任文化財保護主事	川畑　敏則
	文化財調査員	田島　陽子・新井　実和
		久保田　由佳

Ⅲ　今回報告する本書の内容は下記のとおりである。

1　中田遺跡は、長崎県諫早市下大渡野町 2501 番地 1 に所在し、88㎡の発掘調査を行った。
　専岩遺跡は、長崎県諫早市下大渡野町 2537 番に所在し、212㎡の発掘調査を行った。

2　調査は長崎県教育委員会が主体となり、新幹線文化財調査事務所が調査を担当した。

3　中田遺跡・専岩遺跡の発掘調査期間
　①　試掘調査：平成 24 年 5 月 15 日～平成 24 年 5 月 22 日
　②　本 調 査：平成 24 年 7 月 23 日～平成 24 年 8 月 31 日

4　本書の執筆は田島陽子・川畑敏則・古門雅高が分担して行い、執筆者は本文目次に記した。また第Ⅰ章第 1 節（2）試掘調査の経過については、村川がまとめた結果報告より田島が編集して作成した。

5　本書で使用した、調査時の写真は村川・山梨・川淵が、遺物写真は田島が撮影した。

6　本書で用いた調査・整理における土層および土器の色調観察は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 2004 年度版』に準拠した。

7　本書で用いた方位はすべて座標北であり、国土座標は世界測地系による。

8　本書に掲載した遺物の編年について、以下の文献に従った。
　弥生土器：柳田康雄『九州弥生文化の研究』学生社 2002
　土 師 器：柳田康雄「九州土師器の編年」『九州弥生文化の研究』学生社 2002
　須 恵 器：舟山良一編『牛頸窯跡群 - 総括報告書Ⅰ - 』大野城市教育委員会 2008
　瓦質土器：荻野繁春『解説　東播産須恵器系陶器の編年』私家版 1988
　貿易陶磁器：『大宰府条坊 XV』太宰府市教育委員会 2000

9　本書の編集は田島が行った。

10　本書で使用した遺物・図面・写真は、現在、県教育庁新幹線文化財調査事務所に保管している。

11　遺跡番号は中田遺跡が NAK201205、専岩遺跡は SEN201206 である。

目　　次

本文目次

Ⅰ　調査の経過
　1　調査に至る経緯
　(1) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要 …… 1（古門）
　(2) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査の経緯 …… 4（田島）
　(3) 試掘調査の経過 …… 6（村川・田島）
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境・歴史的環境
　(1) 遺跡の立地と地理的環境 …… 10（田島）
　(2) 周辺の遺跡と歴史的環境 …… 10（田島）
Ⅲ　調査の方法 …… 13（田島）
Ⅳ　中田遺跡
　1　調査の概要
　(1) 基本層序 …… 15（田島）
　(2) 包含層出土遺物 …… 15（川畑）
Ⅴ　専岩遺跡
　1　調査の概要
　(1) 基本層序 …… 19（田島）
　(2) 包含層出土遺物 …… 19（川畑）
Ⅵ　まとめ …… 21（田島）

図 版 目 次

第 1 図　九州新幹線西九州ルート　1
第 2 図　範囲確認調査対象地位置図　5
第 3 図　試掘調査出土土器実測図　（S ＝ 1/3）　6
第 4 図　TP1 西壁・北壁土層断面図　（S ＝ 1/40）　7
第 5 図　TP7 北壁・東壁土層断面図　（S ＝ 1/40）　8
第 6 図　中田遺跡・専岩遺跡試掘調査坑配置図と本調査範囲　（S ＝ 1/1,000）　9
第 7 図　諫早市位置図　10
第 8 図　中田遺跡・専岩遺跡周辺地形および遺跡分布図　（S ＝ 1/50,000）　11
第 9 図　中田遺跡・専岩遺跡調査区位置図　（S ＝ 1/1,000）　14
第 10 図　中田遺跡土層図位置図　15
第 11 図　中田遺跡土層断面図　（S ＝ 1/80）　15
第 12 図　中田遺跡Ⅲ層出土土器・磁器実測図　（S ＝ 1/3）　16
第 13 図　中田遺跡出土土製品・石器・金属器実測図　（S ＝ 1/2）　18
第 14 図　専岩遺跡土層図位置図　19
第 15 図　専岩遺跡土層断面図　（S ＝ 1/80）　19
第 16 図　専岩遺跡Ⅳ層出土土器実測図　（S ＝ 1/3）　20
第 17 図　専岩遺跡Ⅳ層出土石器実測図　（S ＝ 1/2）　20

表　目　次

第 1 表　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う試掘範囲確認調査対象地　5
第 2 表　試掘調査出土土器観察表　7
第 3 表　T.P.1 土層注記　7
第 4 表　T.P.7 土層注記　8
第 5 表　中田遺跡Ⅲ層出土土器・磁器観察　17
第 6 表　中田遺跡出土土製品・石器・金属器観察表　18
第 7 表　専岩遺跡Ⅳ層出土土器観察表　20
第 8 表　専岩遺跡Ⅳ層出土石器観察表　20

写 真 目 次

写真 1　試掘調査出土土器　6
写真 2　遺跡遠景　8
写真 3　調査前の状況　13
写真 4　調査風景 1　13
写真 5　調査風景 2　13
写真 6　調査風景 3　13
写真 7　中田遺跡Ⅲ層出土土器・磁器　17
写真 8　中田遺跡Ⅲ層出土土製品・石器・金属器　18
写真 9　中田遺跡Ⅲ層遺物出土状況 1　18
写真 10　中田遺跡Ⅲ層遺物出土状況 2　18
写真 11　専岩遺跡Ⅳ層出土土器　20
写真 12　専岩遺跡Ⅳ層出土石器　20

Ⅰ　調査の経過

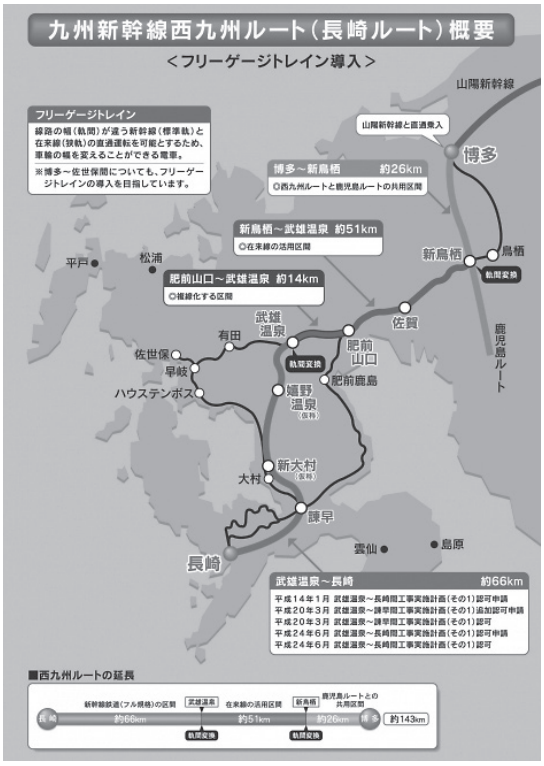
1　調査に至る経緯

（1）九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の概要

①　概要

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）は、福岡市と鹿児島市ならびに長崎市を結ぶ整備新幹線計画（九州新幹線）のうち、福岡市と長崎市を結ぶルートを指す。

博多駅 ～ 新鳥栖駅間（約 26Km）は鹿児島ルートと路線を共有し、新鳥栖駅 ～ 武雄温泉駅間（約 51Km）は在来線を活用する。武雄温泉駅 ～ 長崎間（約 66Km）はフル規格の新線で、フリーゲージトレインを導入して 2022 年度内の開業を目指していたが、フリーゲージトレインの開発が遅れ、2022 年度までの量産化が間に合わないことから、在来線と新幹線を乗り継ぐ「リレー方式」で 2022 年度内に暫定開業することとなった。



第１図　九州新幹線西九州ルート図
（長崎県ホームページより）

営業主体は九州旅客鉄道（ＪＲ九州）、建設主体は鉄道建設・運輸施設整備支援機構（鉄道・運輸機構）である。

車両基地は本県大村市の竹松町・沖田町付近に建設され、県内駅は長崎、諫早、新大村（仮称）である。

②　沿革（長崎県ホームページを一部改編）

国鉄時代

1973年（昭和48年）11月：全国新幹線鉄道整備法に基づく整備計画路線として決定、建設の指示。

1985年（昭和60年）　1月：博多～長崎間（早岐回り）の駅・ルートの概要を公表。

1986年（昭和61年）　9月：博多～長崎間（早岐回り）の環境影響報告書案の公表。

JR九州発足後

1987年（昭和62年）　4月：国鉄分割・民営化（JRの発足）

10月：長崎市・佐賀市に着工準備作業所設置。

1992年（平成４年）11月：新ルート案（短絡ルート）を地元案として決定。

1996年（平成８年）12月：整備新幹線の新しい基本スキーム決定上下分離方式により、JRは受益の範囲を限度とした貸付料を支払う。

1998年（平成10年）　1月：政府・与党整備新幹線検討委員会結果

武雄温泉から新大村（仮称）間の駅・ルート公表を速やかに行い、引き続き環境影響評価に着手するとともに、長崎駅の駅部調査を開

始する。

2月：武雄温泉～新大村（仮称）間の駅・ルートを公表。

5月：長崎駅部構想調査の開始。

10月：武雄温泉～新大村（仮称）間の環境影響評価着手。

2000年（平成12年） 3月：長崎駅部構想調査委員会取りまとめ報告。駅位置、規模の大枠決定。

11月：環境影響評価準備書に対する知事意見の提出。

12月：政府・与党整備新幹線検討委員会結果（政府・与党申合せ）

武雄温泉～長崎間について、環境影響評価終了後、工事実施計画の認可申請を行う。

鹿児島ルートにおいて、交通結節点として、新鳥栖駅の整備を行う。

今回着工を行わない区間については、社会経済情勢、国・地方公共団体の財政事情等に照らし、東北新幹線盛岡・八戸間（H14年12月開業）及び九州新幹線新八代・西鹿児島間（H16年3月開業）の両区間の完成後に見直す。

2002年（平成14年） １月：環境影響評価書（武雄温泉～新大村間）・（新大村～長崎間）の送付工事実施計画認可申請（武雄温泉から長崎間）。

2004年（平成16年）12月：「整備新幹線の取扱いについて」（12月16日　政府・与党申合せ）において、「長崎ルートについては、並行在来線区間の運営のあり方について調整が整った場合には武雄温泉～諫早間に着工する」ことが盛り込まれ、平成17年度予算に10億円の事業費が配分された。

2005年（平成17年）12月：平成18年度の整備新幹線予算の線区別の事業費が公表され、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉から諫早間に、平成17年度と同額の10億円の事業費が配分された。

2007年（平成19年）12月：肥前山口～諫早間を経営分離せず、開業後20年間JR九州が運行維持することを佐賀県、長崎県、JR九州の三者が基本合意した。

2008年（平成20年） ３月：国土交通省が鉄道･運輸機構に対し、武雄温泉～諫早間の工事計画を着工認可した。

４月：肥前山口－諫早間の鉄道施設の資産譲渡・維持管理に係る負担割合を佐賀県1対長崎県2とすることを確認した。

４月：佐賀県嬉野市で起工式を開催。終了後、諫早市で建設起工記念式典を開催。

11月：鉄道・運輸機構が大村鉄道建設所および武雄鉄道建設所を設置した。

12月：整備新幹線に係る政府・与党ワーキンググループが開催され、西九州ルートについては下記のとおり合意がなされた。（概略）

(1) 「新規着工区間」として、九州新幹線（長崎ルート）長崎駅部を、平成２１年末までに認可する検討を進め、結論を得る。

(2) 「その他の区間」として、諫早～長崎間について、引き続き検討を行う、なお、肥前山口～武雄温泉間の複線化等を進めることとし、さらにその具体化の方法の検討を行う。

12月：平成21年度の整備新幹線予算の線区別の事業費が公表され、九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）の武雄温泉から諫早間に50億円の事業費が配分されるとともに、新たに長崎駅部や肥前山口～武雄温泉間の複線化を検討する予算も計上された。

2009年（平成21年）10月：国土交通大臣が前年12月の政府・与党合意の新規着工検討区間については、白紙とし、新しい政府・与党で整備のあり方を決めていくとした。

12月：「整備新幹線問題検討会議」が開催され、民間資金の活用、並行在来線維持のためのJRの協力・支援が必要とし、費用対効果、沿線自治体の取組等による着工の順位付けを検討するなどの「整備新幹線の整備に関する基本方針」及び「当面の整備新幹線の整備方針」が決定された。

４月：大村市に長崎県新幹線用地事務所を設置した。

８月：整備新幹線問題検討会議が開催され、「整備新幹線の未着工区間等の取扱いについて」が決定され、西九州ルートにおいては、

(1) 肥前山口・武雄温泉の単線区間の取扱い

(2) 軌間可変電車（フリーゲージトレイン）の取扱い（実用化）が課題とされ、詳細に検討していくとされた。

12月：整備新幹線問題検討会議が開催され、「整備新幹線の未着工区間等の取扱いについて」

(平成22年8月決定）に掲げる各線区の課題について、さらに詳細な検討を進めることとされた。

2011年（平成23年）10月：軌間可変技術評価委員会において、「軌間可変電車の実用化に向けた基本的な走行可能性に関する技術は確立していると判断される。」と評価された。

12月：整備新幹線問題検討会議が開催され、現在建設中の武雄温泉～諫早間と新たな区間である諫早～長崎間を一体的な事業（佐世保線肥前山口～武雄温泉間の複線化事業を含む。）として扱い、軌間可変電車方式（標準軌）により整備し、諫早～長崎間の着工から概ね10年後に完成・開業するとする着工方針が示された。

2012年（平成24年）４月：未着工区間の収支採算性と投資効果を改めて確認するために、整備新幹線小委員会の報告書がまとめられたことを受けて、整備新幹線問題検討会議が開催され、収支採算性と投資効果について確認がなされた。また、営業主体のJR九州の同意がなされた。

６月：国土交通省が鉄道･運輸機構に対し、武雄温泉～長崎間の工事計画

（フル規格）を着工認可した。

認可後の動き

2012年（平成24年）８月：長崎市で諫早～長崎間の起工式を開催。終了後、建設起工式典を開催した。

2013年（平成25年）４月：鉄道・運輸機構が、長崎鉄道建設所を設置した。

2014年（平成26年）２月：フリーゲージトレインに係る軌間可変技術評価委員会が開催され、「軌間可変台車の基本的な耐久性能の確保に目処がついた。」と評価された。

４月：熊本総合車両所において、第三次試験車両（４両編成）がマスコミに公開された。

４月： フリーゲージトレインの性能確認試験が開始された。

10月：フリーゲージトレインの３モード耐久走行試験が開始された。

12月：フリーゲージトレイン第三次試験車両のスラスト軸受のオイルシールに部分的な欠損、すべり軸受と車軸の接触部に微細な摩耗痕の発生が確認されたため、同車両の３モード耐久走行試験を一時休止。

2015年（平成27年）１月：政府・与党整備新幹線検討委員会が開催され、「整備新幹線の取扱いについて（政府・与党申合せ）」が決定された。

・西九州ルートにおいては、「フリーゲージトレインの技術開発を推進し、完成・開業時期を平成34年度から可能な限り前倒しする。」とされた。

・さらに、九州新幹線西九州ルートも対象に含めて、貸付料収入の前倒し活用等、必要な財源措置を講じるとされた。

８月：俵坂トンネル（嬉野市 - 長崎県東彼杵町、5.7km）が６年の工期を経て貫通。

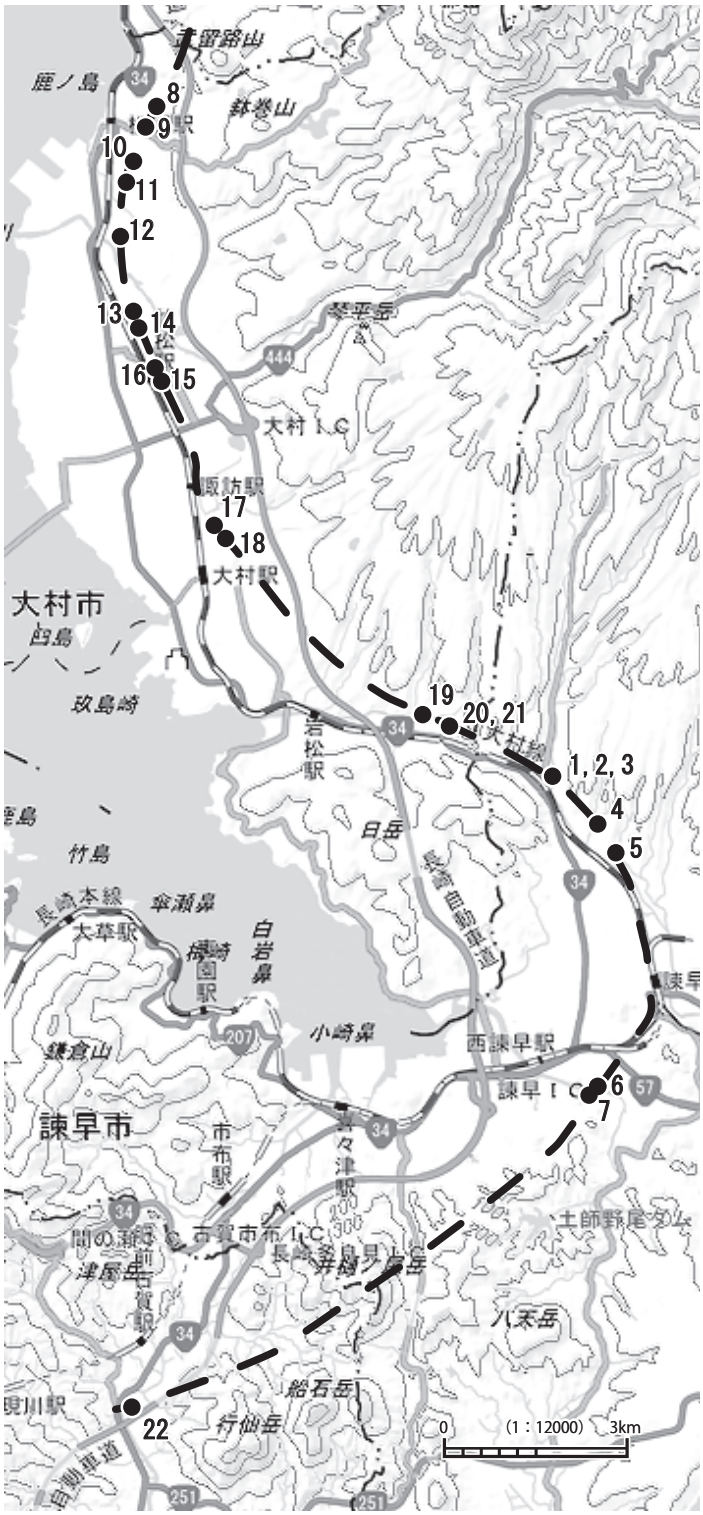
今後の予定

2022年度中：武雄温泉－長崎間、在来線特急とのリレー方式で暫定開業（予定）。

(2) 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う発掘調査の経緯

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に先立ち、長崎県教育庁学芸文化課は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構および該当市教育委員会文化財担当課とともに、平成21年10月26日から30日にかけ、大村市・諫早市・東彼杵町における九州新幹線西九州ルート建設工事に係る遺跡の分布調査を実施した。その結果、当該地域において、路線部・車両基地の範囲内の26地点で発掘調査が必要であることが確認された。

その結果を基に再度協議・検討を重ね、平成22年度の尾和谷城跡の試掘調査を皮切りに該当遺跡22箇所の試掘調査並びに範囲確認調査を開始した（第2図・第1表）。



第２図　範囲確認調査対象地位置図

（地理院地図電子国土 Web　http://maps.gsi.go.jp を基に作成　S ＝ 1/12,000）

第１表　九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う試掘範囲確認調査対象地

	遺跡名	所在地	本調査	本調査対象面積
1	尾和谷城跡	長崎県諫早市下大渡野町	○	2,314㎡
2	**尾和谷城跡隣接地**	**長崎県諫早市下大渡野町**	**○**	**中田遺跡：88㎡ 専岩遺跡 212㎡**
3	新諫早 SS 建設予定地	長崎県諫早市下大渡野町	○	上三反田遺跡 ：275㎡
4	平松城跡	長崎県諫早市本明町	-	
5	本明町 18-②区	長崎県諫早市本明町	-	
6	（仮称）平山遺跡	長崎県諫早市平山町	○	一里松遺跡 ：580㎡
7	（仮称）平山遺跡対岸	長崎県諫早市平山町	-	
8	西の谷遺跡	長崎県大村市松原３丁目	-	
9	妙光寺跡	長崎県大村市松原１丁目	-	
10	大忠平遺跡	長崎県大村市草場町	-	
11	大堂遺跡	長崎県大村市皆同町	-	
12	今富城跡	長崎県大村市今富町	○	予定
13	竹松遺跡	長崎県大村市竹松町 ・大村市沖田町	○	100,633㎡
14	平野遺跡	長崎県大村市鬼橋町	○	1,700㎡
15	（仮）小路口遺跡	長崎県大村市小路口町	-	
16	小路口遺跡隣接地	長崎県大村市小路口町	-	
17	三城城下跡	長崎県大村市諏訪２丁目	○	1,470㎡
18	三城城	長崎県大村市三城町	○	予定
19	平ノ前城跡	長崎県大村市小川内町	○	予定
20	岸高遺跡	長崎県大村市中里町	-	
21	岸高遺跡（仮）	長崎県大村市中里町	-	
22	八郎川周辺	長崎県長崎市東町	-	

(3) 試掘調査の経過

① 調　査

試掘調査の対象地は谷間の沖積地であるが、西端は尾和谷城跡の裾部になることから、一段高くなり段丘状を呈している。東端は本明川に面していて、その端から 50 m西は段差があり、ここも河岸段丘面だと思われる。全般的には三段の段丘面がある。

試掘坑を一番高い段丘面に１個所、二段目の一番広い面に６箇所、三段目の本明川に面したところに２箇所の合計９箇所設定した。間隔としては 20m を基本とし、西端の高い段丘面から東へ TP1 ～ TP9 の番号を付した（第６図）。

調査対象地の現況はいずれも水田で、試掘調査を進めていくと、水田耕作土とその下の床土の下には礫層が認められた。しかし、西端の TP1 では、礫層が全く認められず、TP3・TP7 も礫層が薄いことから、現況は３段の段丘面が、それぞれほぼフラットな水田をなしているが、かつて微高地だったところが礫層に覆われないか、その量が少なかったものと推測され、もともとは起伏があったものと考えられた。

TP1 で褐灰色弱粘性土層（地表下 190㎝）から、弥生時代の甕や高坏脚部の他、古墳時代初頭の甕の破片等計４点が出土した。弥生時代～古墳時代初頭にかけての遺物包含層であると判断される。TP7 では、礫層を重機で掘上げた後、７層の褐灰色～暗灰黄色土層から弥生土器が出土した。排土を精査したところその中から弥生土器 13 点を確認した。TP3 は、礫の堆積がほとんど認められなかった。北壁では西側へ落ち込むシルト質土層の堆積が確認され、旧河川の落ち際ではないかとも考えられた。

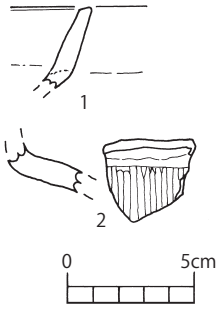
② 層　位

弥生土器が出土し、この時期の包含層が確認された TP1 の土層を示すと以下のようになる。

1　耕作土（褐灰色土層 7.5YR6/1）
2　橙色土層（7.5YR6/6）
3　黒褐色土層（7.5YR3/2）
4　灰褐色土層（黄色小粒礫混じり 7.5YR4/2）
5　黒褐色土層（7.5YR3/2）
6　褐灰色粘質土層（5YR6/1）
7　橙色粘質土層（5YR6/6）
8　褐灰色弱粘質土層（7.5YR5/1）この層の下部より、弥生土器４点が出土。
9　褐灰色粘土層（10YR6/1）

③　遺物の出土状況（第３図　写真１）

今回の試掘調査で TP1 の８層褐灰色土層から弥生土器および古墳時代初頭の土器等４点と TP7 の７層褐灰色土層中から弥生土器等２点が出土したので、その当時の包含層が残存していることが確認できた。TP2・3・6 は耕作土～床土ないしは礫層の上面からの出土であり、新しい



第３図　試掘調査出土 土器実測図（1/3）

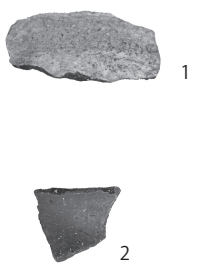


写真1　試掘調査出土 土器

ビニール等の混入が認められたことから攪乱層だと考えられる。今回の試掘調査で TP1 の褐灰色土層と TP7 の 7 層褐灰色土層中から弥生土器等が出土したので、その当時の包含層が残存していることが確認できた。今回の調査での出土遺物総数は 96 点となる。

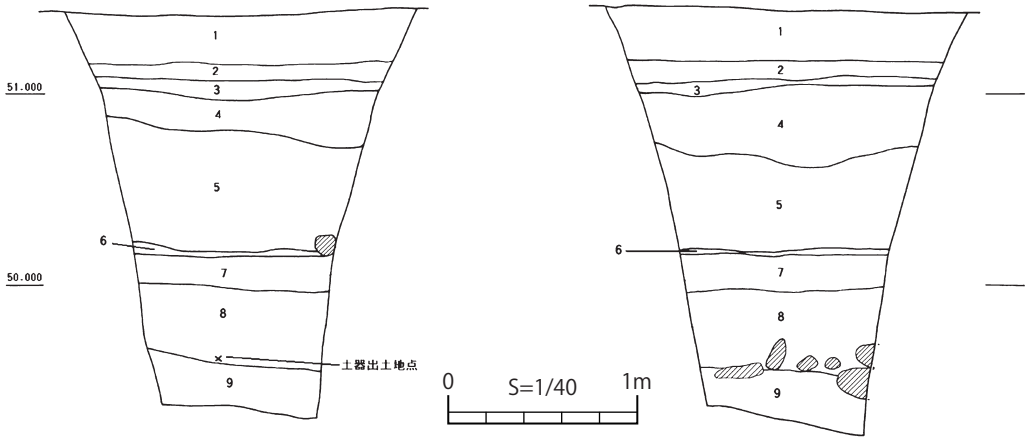
第 2 表　試掘調査出土土器観察表

番号	器種	出土地区	層位	法量(cm)(　)は復元			調整		色調		胎土	焼成	備考
				口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
1	複合口縁壷	T.P.1	8層	－	－	－	－	－	7.5YR 8/4 浅黄橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	石英、長石　砂粒混	やや良	口縁部
2	弥生　壷	T.P.7	7層	－	－	－	ナデ	ミガキ	10YR 5/6 黄褐	10YR 6/8 明黄褐	角閃石、石英、長石　やや精良	良好	肩部

④　まとめ

発掘調査の結果、TP1 と TP7 で弥生時代～古墳時代にかけての包含層が確認された（第 4 図、5 図）。TP1 は調査対象地の西端になり、TP7 は東端に近い。この TP1 と TP7 の間は、厚い礫層の堆積があり、弥生時代や古墳時代の出土遺物も認められなかった。遺跡範囲としては TP1 周辺と TP7 周辺の範囲に限定されるものと考えられる。

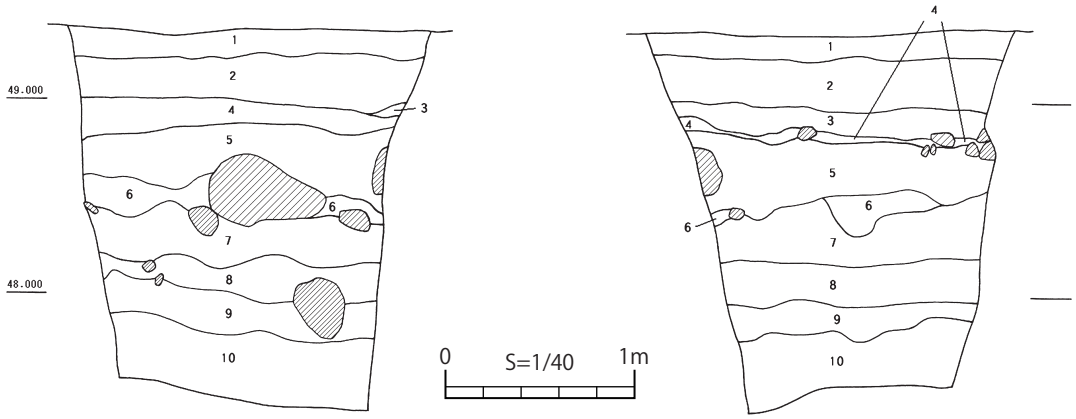
今後の開発等を行う場合は、今回確認された遺跡範囲（本調査範囲；TP1 周辺 ;80㎡、TP7 周辺 220㎡、計 300㎡）及び周辺に於いて工事を行う場合は、埋蔵文化財の取り扱いについて、県教育委員会及び諫早市教育委員会との協議が必要である。今後は、TP1 周辺を中田遺跡、TP7 周辺を専岩遺跡の新規発見遺跡として取り扱う。



第４図　TP1　西壁・北壁土層断面図（８層；包含層　S=1/40）

第３表　TP1 土層注記

番号	土色	マンセル記号	備考
1	褐灰色	7.5YR6/1	
2	橙色	7.5YR6/6	
3	黒褐色	7.5YR3/2	
4	灰褐色	7.5YR4/2	黄色小粒混じり
5	黒褐色	7.5YR3/2	
6	褐灰色	5YR6/1	粘土質
7	橙色	5YR6/6	粘土質・弱粘質
8	褐灰色	7.5YR5/1	粘性弱い
9	褐灰色	10YR6/1	粘土

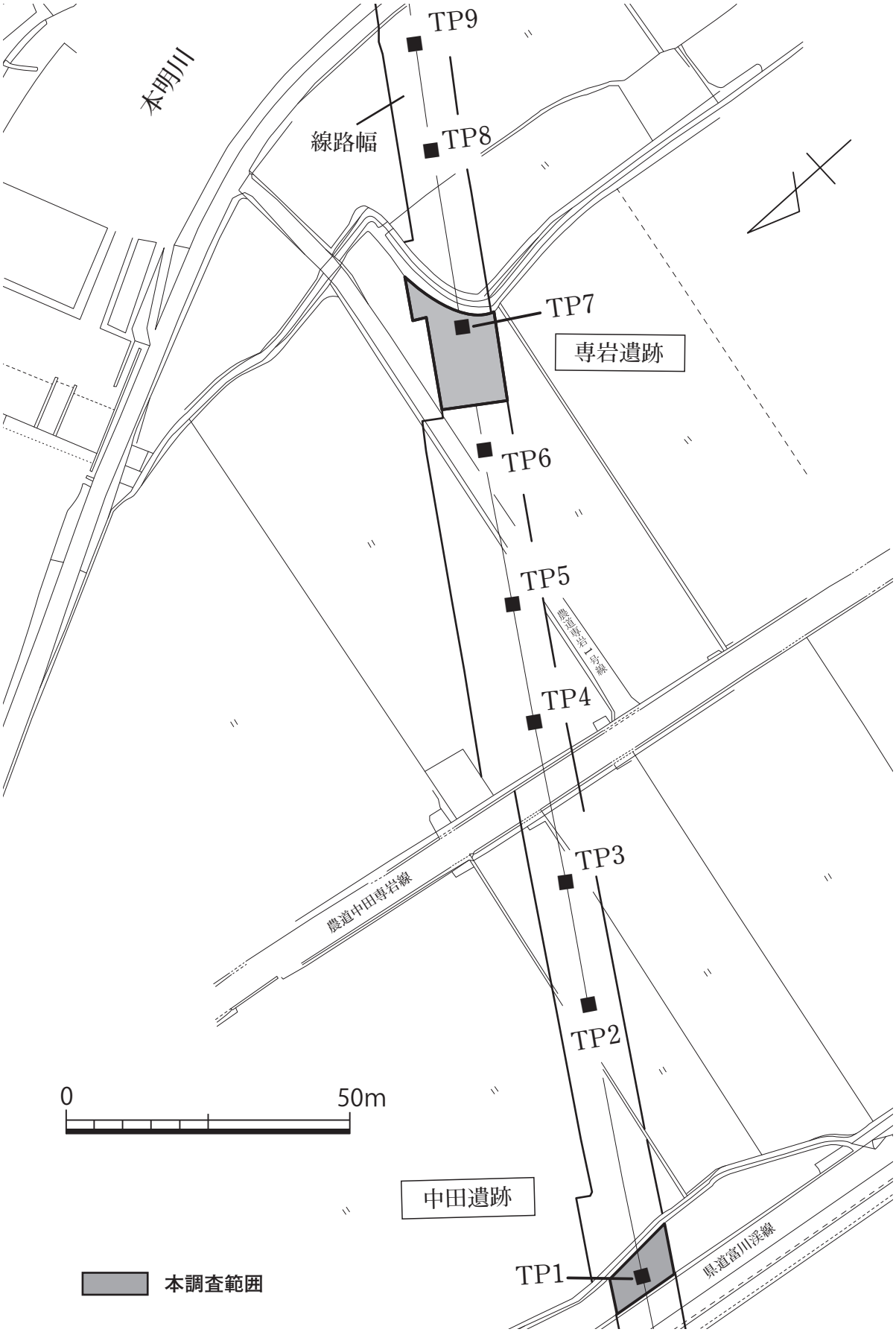


第５図　TP7　北壁・東壁土層断面図（５・７層；包含層　S=1/40）

第４表　TP7 土層注記

番号	土色	マンセル記号	備考
1	黒褐色	10YR3/2	
2	褐灰色	10YR5/1	白色砂粒・礫を含む
3	暗灰黄色	2.5Y5/2	2 ～ 10cm の礫を含む
4	灰黄褐色	10YR5/2 ～ 4/2	礫を多く含む、やや酸化
5	灰黄褐色	10YR5/2	礫を多く含む
6	灰黄褐色	10YR5/2	５層に比べしまり弱い
7	褐灰色	10YR6/1	粘性あり、土器出土
8	黒褐色～黄灰色	2.5Y3/1 ～ 4/1	2 ～ 10cm の礫をまばらに含む
9	灰黄色	2.5Y6/2	シルト質
10	暗灰黄色～黄灰色	2.5Y4/2 ～ 5/1	シルト質、一部赤褐色をおびる

写真２　遺跡遠景（手前が本明川）



第 6 図　中田遺跡・専岩遺跡試掘調査坑配置図と本調査範囲（S ＝ 1/1,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境・歴史的環境

(1) 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の所在する長崎県諫早市は、県本土中央部に位置する。北を多良岳・経ヶ岳・五家原岳等からなる雄大な多良山麓、東を有明海、西を大村湾、南を橘湾に囲まれる。長崎・大村方面に至る鉄道、一般国道、佐賀県へ至る高速道路が集中し、古くから交通の要衝であった。

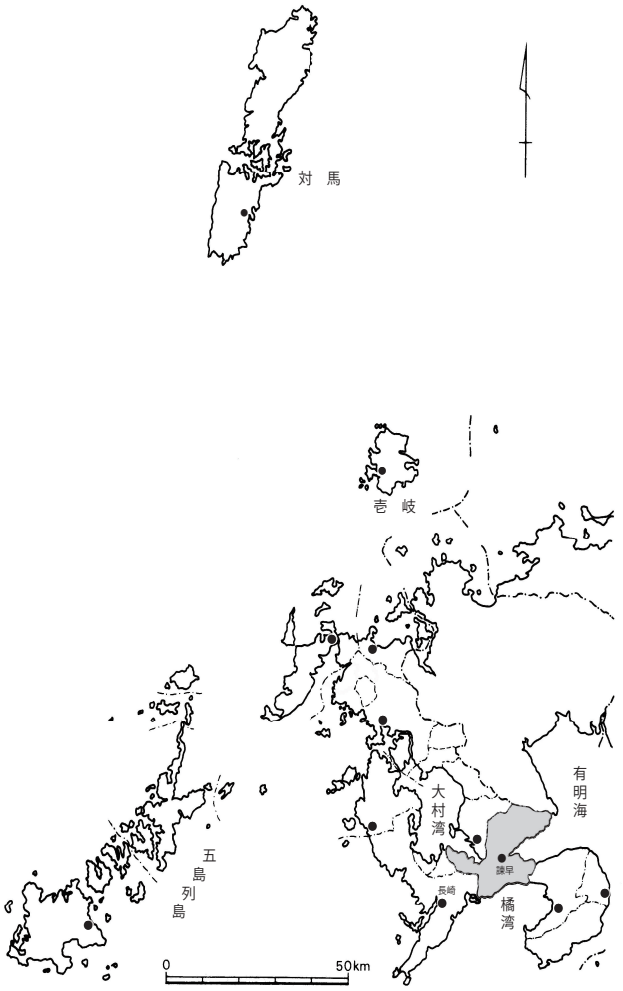
多良山麓南側にある標高 1,057 ｍの五家原岳を水源に持つ一級河川である本明川は、支流である富川・湯野尾川を上流とし急峻な斜面を南下した後、下流域に形成した扇状地である諫早市街地の広がる諫早平野の合間を緩やかに貫流し、福田川・半造川などの支流を合わせて有明海へ注ぐ。

本明川は大村市との市境付近で支流である西谷川と合流する。その合流地点付近の谷間の沖積地に中田遺跡・専岩遺跡は所在する。現在は水田として利用されている場所である。

(2) 周辺の遺跡と歴史的環境

本遺跡周辺には、後期旧石器時代以降近代に至るまでの数々の遺跡が存在する。

後期旧石器時代の遺跡としてナイフ形石器や細石刃、台形石器などが出土した下峰原遺跡や、その西に隣接する上峰原遺跡、下峰原高場遺跡が挙げられる。また諫早・大村市境を流れ大村湾に注ぐ真崎川流域にも散布地が見られるが、ナイフ形石器出土の報告がされている遺跡は真崎西遺跡のみである。同様に大村湾に注ぐ河川である西大川沿いに着目すれば、諫早中核工業団地用地造成工事および九州横断自動車道（現長崎自動車道）建設工事に伴う発掘調査で報告された、西輪久道遺跡、鷹野遺跡、岩下遺跡、雀ノ倉遺跡などが挙げられる。中でも西輪久道遺跡では、標高約 20m の低丘陵の斜面に立地し、旧石器時代の礫群などを検出している。出土遺物は、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・角錐状石器・三稜尖頭器に加え細石刃などの日の岳Ⅱ層期に並行または先行する上層石器群、ナイフ形石器・横長の剥片の打面を基部とする刃部の長い台形石器・剥片尖頭器が伴う日の岳Ⅲ層に相当する下層石器群に分離されるこ



第７図　諫早市位置図

①下峰原遺跡　⑤西輪久道遺跡　⑨浜田遺跡　⑬平松城跡　⑰平ノ前城跡
②上峰原遺跡　⑥鷹野遺跡　⑩風観岳支石墓群　⑭真崎城跡
③下峰原高場遺跡　⑦岩下遺跡　⑪本明石棺群　⑮伊賀峰城跡
④真崎西遺跡　⑧雀ノ倉遺跡　⑫尾和谷城跡　⑯岸高城跡

第 8 図　中田遺跡・専岩遺跡周辺地形および遺跡分布図（1/50,000）

とが確認された。

縄文時代については、下峰原遺跡で縄文時代晩期の埋甕と突帯文土器が出土しているほか、前期の曽畑式土器を主体とする浜田遺跡が上げられる。また、縄文時代から弥生時代に及ぶ遺跡として、当遺跡南西約 1km の標高 236m を測る風観岳鞍部一帯に広がる風観岳支石墓群が挙げられる。ここは後述する長崎街道が走るが、それを挟んで西側の支石墓の主体部は箱式石棺、東側は土壙を主体部に持つ支石墓が多いという傾向が見て取れる。また、西側丘陵部から石器約 4,600 点、土器約 600 点が出土した上に、ピット群の検出が見られるなど、一部墓域と生活域が同時に存在するということが確認された。

古墳時代に入ると、本明川左岸、風観岳対岸の台地先端に古墳時代初頭の本明石棺群が築かれる。６基の箱式石棺を検出し、棺内には刀子などの鉄製品と土器が副葬されており、昭和 52 年に市指定史跡となっている。

古代については、律令期の官道である西海道の推定ルートが付近を通っていたといわれている。

中世になると、古代彼杵郡・高来郡の境界は国境として大村に接することから、地理的・軍事的要因により、城がいくつか築かれた。

当遺跡南部に隣接している尾和谷城は、諫早城主西郷石見守尚善の命により大村市境の「開」の丘陵に築かれた西郷氏の支城である。『大村郷村記』に、文明６（1474）年、有馬貴純の大村攻め（中岳合戦）において西郷尚善が先鋒として支城尾和谷城を経由して大村に攻め入ったときのことが記されているほか、元亀３（1572）年、西郷純尭、武雄の後藤貴明、平戸の松浦鎮信率総勢 1500 余の連合軍が、大村純忠の三城城に攻め込んだ所謂「三城七騎籠」にて討ち死にした、西郷氏の部将尾和谷軍兵衛の居城とされる。平成 14（2002）年の発掘調査において、屋根瓦を持たない総柱の掘立柱建物跡を中心とした建物跡群に、石組みの池状遺構、暗渠等と考えられる溝状遺構、炭窯遺構、廃絶したピット内に宝篋印塔相輪が埋納された祭祀遺構など、当時の様相を眼前に現す遺構が検出している。遺物に関しては、青花・青磁・白磁・天目等の貿易陶磁器を主体とし、現川焼等の近世陶磁器も出土している。そのほか、平松城･真崎城･伊賀峰城･岸高城･平ノ前城などが、諫早・大村双方睨みを利かせる戦略拠点として築城された。

近世には、当遺跡と尾和谷城の西側を通り風観岳の鞍部を経由し、小倉常盤橋から長崎出島までを結ぶ長崎街道が走っていた。長崎街道は、鎖国政策の下、幕府が日本で唯一外交が可能であった長崎へ通じる街道として重視された。諫早永昌宿から大村宿の間で破籠井町から山間部に入り日野見岳の麓を経て、大村市との境界に至るまでの 1,460m の区間は、当時の面影を良好に残しており、「大村街道」として昭和 52（1977）年に諫早市指定文化財となった。また、現在の諫早市と大村市の行政境には旧諫早藩と大村藩の藩境として築かれた積石塚が 35 基ほど残っている。

【参考文献】

秀島　貞康編　1998『下峰原遺跡－諫早西部団地開発事業に伴う発掘調査報告書－』諫早市埋蔵文化財協議会

2004『尾和谷城跡』諫早市文化財調査報告書　第 16 集　諫早市教育委員会

2006『風観岳支石墓群発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書　第 19 集　諫早市教育委員会

Ⅲ　調査の方法

試掘調査の結果に基づき、九州新幹線の路線となる範囲で中田遺跡は 88㎡、専岩遺跡は 212㎡の本調査を行った。これを基に調査費用、調査日数、調査員、作業員等の人数を勘案し調査計画を策定した。

中田遺跡は、試掘調査で無遺物と確認された表土下 1.5 m を重機により掘削し、その後包含層約 50cm を人力により掘削・精査した。専岩遺跡は、水田の基盤整備に伴う現代の埋め土約 1 m を重機により掘削し、その後包含層約 50cm を人力により掘削・精査した。

遺構検出作業は、いずれの遺跡も検出時、掘削途中、遺物出土状況、完掘と各段階を踏まえ、慎重に行った。また、実測図作成は、全体平面図・土層断面図ともに 20 分の 1 で行った。

写真撮影は遺構検出の各段階で行った。撮影機器は、6 × 7 判（MamiyaRZ 67）、35mm（Nikon F3）、デジタルカメラ（SONY DSC-HX200V）を使用した。なお、フィルムはいずれもモノクロ・カラーリバーサルで撮影を行った。

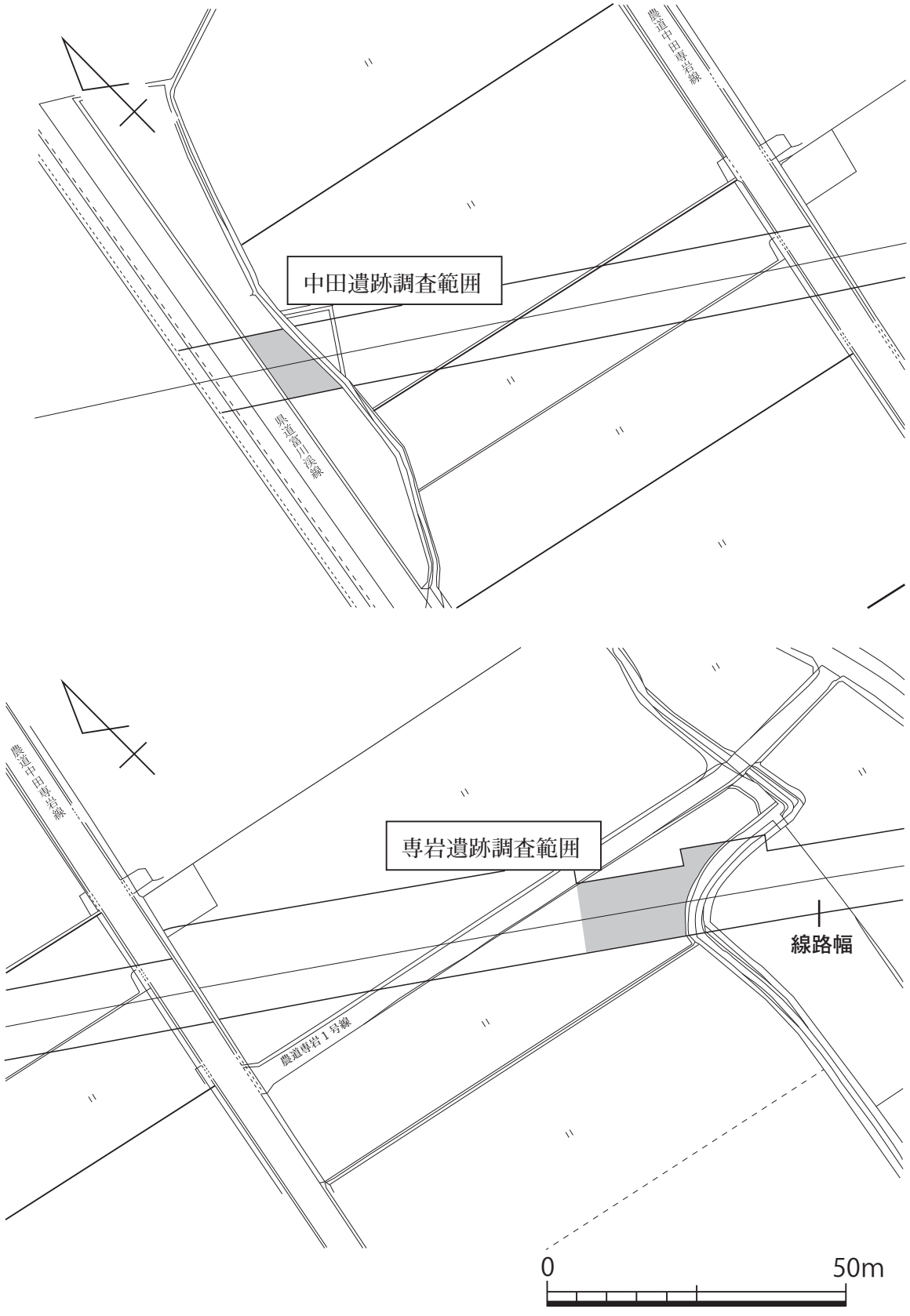
遺物の取り上げについては、土層堆積状況を確認しながら、層位に従って慎重に取り上げを行った。

写真３　調査前の状況

写真４　調査風景１

写真５　調査風景２

写真６　調査風景３



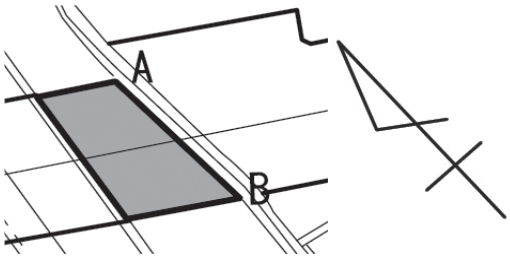
第９図　中田遺跡・専岩遺跡調査区位置図（S＝1/1,000）

Ⅳ　中田遺跡

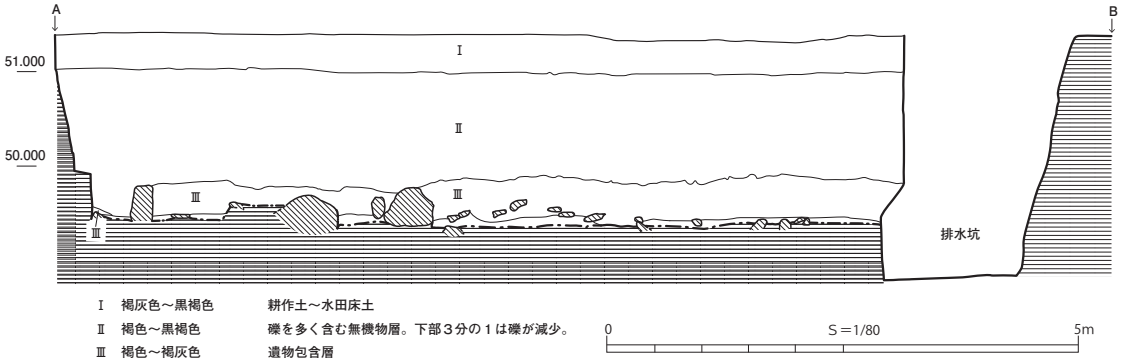
1　調査の概要

(1) 基本層序

中田遺跡におけるⅠ層は、褐灰色から黒褐色を呈する耕作土・水田床土であり、重機による掘削を行った。Ⅱ層は、褐色から黒褐色を呈する層で無遺物層である。直径３cm ～ 20cm の礫が多く含まれるが、下部３分の１の礫は大きさも直径 0.2 ～ 0.5cm と小さくなり割合も減少する。Ⅲ層は、褐色から褐灰色色を呈する粘質土層で、遺物包含層である。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が一定量出土し、上部からは古代末から中世初頭の貿易陶磁器などが少量出土している。遺構は検出されなかった。



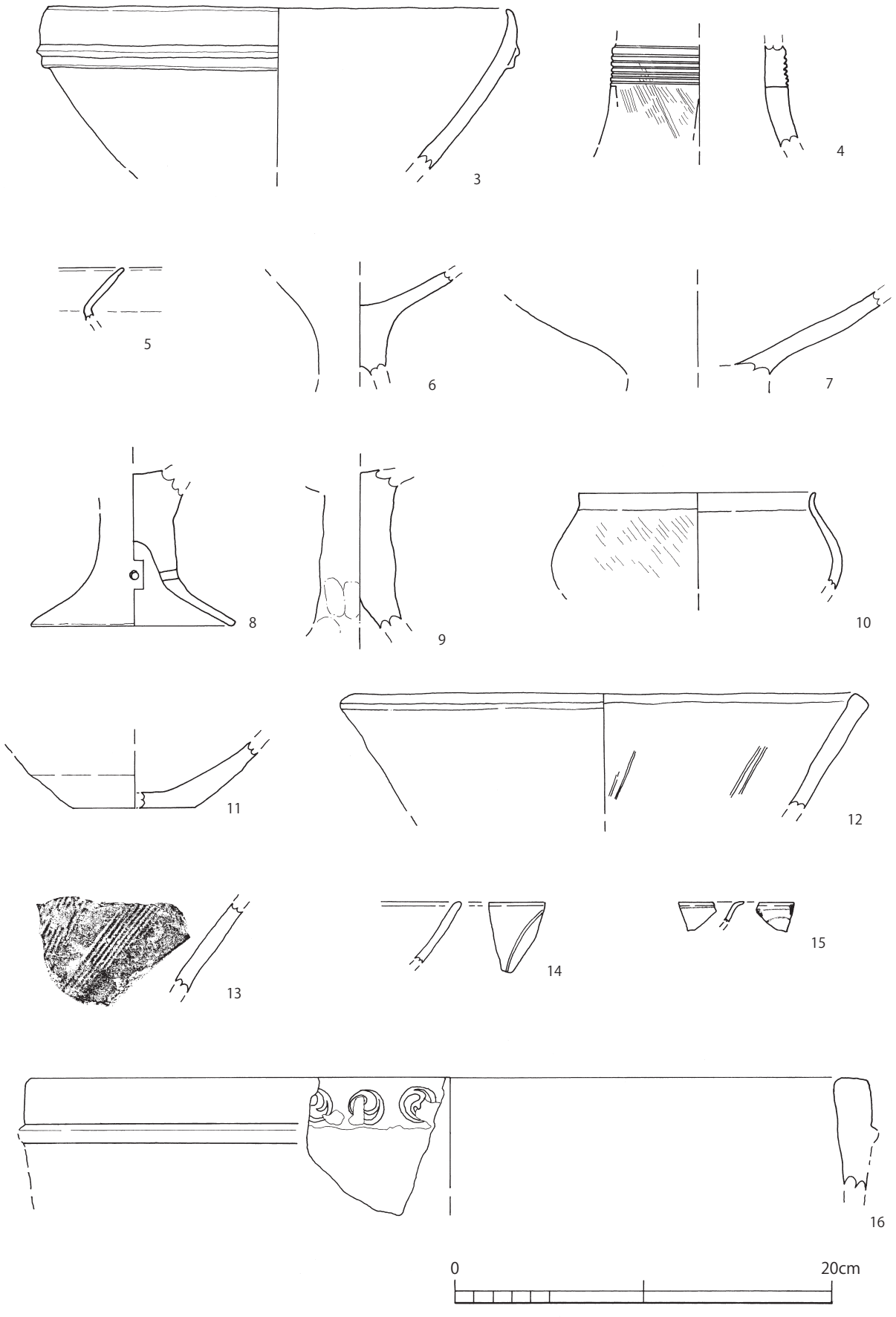
第 10 図　中田遺跡土層図位置図



第 11 図　中田遺跡土層断面図（S ＝ 1/80）

(2) 包含層出土遺物（第 12 図、13 図、写真 7、8）

3 は弥生時代中期の高坏である。断面 M 字の突帯が口縁部直下に巡る。形は壷の体部下半に似る。4 は弥生時代後期の肥前型器台である。筒部中位の破片で、斜位のハケメ後横位の沈線が施され 7 条の残存が見られる。また、方形の透かし孔が残る。5 ～ 10 は古墳時代の遺物である。5 は甕の口縁部である。薄い作りである。6 は高杯の杯部と脚部の接合部である。杯部は急な角度で立ち上がる。7 は大型の高杯の杯部である。脚部との接合部から欠損している。摩滅が激しい。8 は高杯の脚部である。4 箇所の円形の穿孔が施される。9 も高杯脚部である。外面には指頭痕が残り、内面はヘラ状工具による削り痕が残る。円形の穿孔が見られる。10 は短頸壷である。摩滅が激しいが外面に斜位のハケメが残る。11 ～ 16 は中世の遺物である。11 は東播系捏ね鉢の底部である。回転糸切り痕が残る。12 は砂粒を多く含む瓦質の擂鉢である。摩滅が激しいが擂り目がわずかに残る。13 も瓦質の擂鉢である。8 条の擂り目が施される。14 は鎬連弁文が施された龍泉窯系青磁椀の口縁部である。灰白の胎にオリーブ色の釉が厚く掛かる。15 は明染付け端反り皿口縁部である。内外面の口縁部下に一条の圏線が巡り、外面は圏線下に草花文と思われる文様が描かれる。16 は瓦質火鉢の口縁部である。口縁端部は水平に面取りされている。内外面ともに口縁部はヨコナデで調整され、外面には二つ巴文を印刻しその下に突帯が巡る。胎土は灰白で、表面は黒色に燻されている。



第 12 図　中田遺跡Ⅲ層出土 土器・磁器実測図（S ＝ 1 / 3）

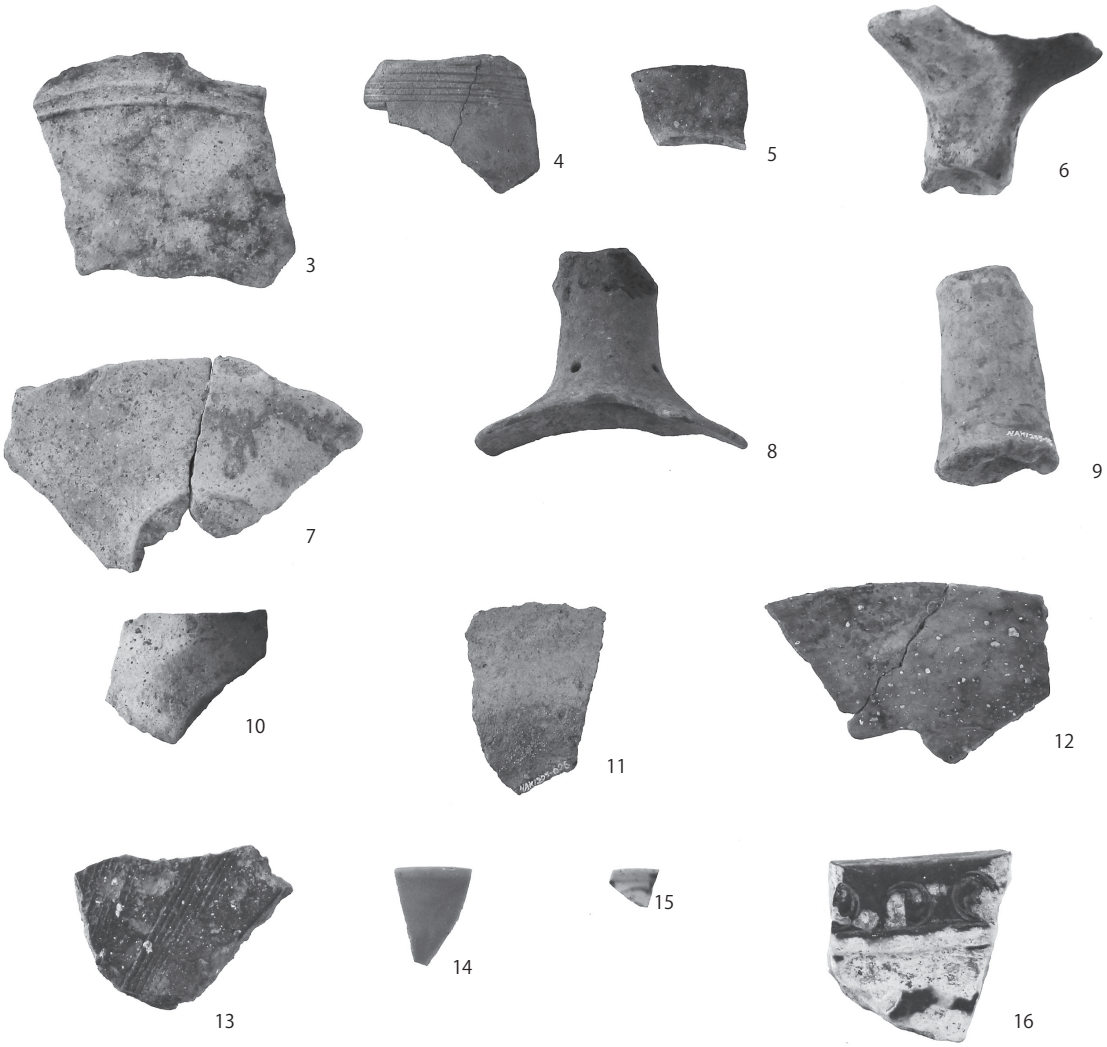
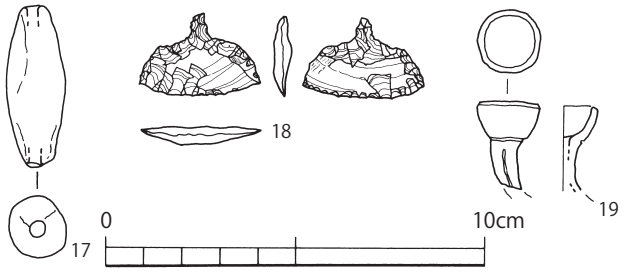


写真７　中田遺跡Ⅲ層出土 土器・磁器

第５表　中田遺跡Ⅲ層出土 土器・磁器観察表

番号	器種	法量(cm)(　)は復元			調整		色調		胎土	焼成	備考
		口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
3	弥生　鉢	(24.8)	–	–	ナデ	ナデ	10YR 7/6 明黄褐	10YR 7/3 にぶい黄橙	角閃石、石英、長石、赤色粒子　やや精良	やや不良	口縁部～体部
4	弥生　器台	–	–	–	ナデ	ハケメ	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/6 橙	角閃石、石英、長石　精良	良好	脚部
5	土師器 甕	–	–	–	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y 黄褐 5/3	10YR 6/8 明黄褐　6/8	金雲母、石英、長石　やや精良	良好	口縁部
6	土師器　高坏	–	–	–	ナデ	ナデ	10YR 7/6 明黄褐	10YR 8/3 浅黄橙	雲母、石英、長石、褐色粒子　やや精良	やや不良	脚部と坏部の接合部
7	土師器　高坏	–	–	–	ナデ	ナデ	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	雲母、石英、長石、赤色粒子　やや精良	やや不良	坏部
8	土師器　高坏	–	–	10.5	ナデ	ナデ	7.5YR 5/6 明褐	10YR 6/6　明黄褐	石英、長石、褐色粒子　精良	良好	脚部
9	土師器　高坏	–	–	–	ヘラ削り	指押さえ / ナデ	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	角閃石、石英、長石、角閃石、赤色粒子　やや精良	良好	脚部
10	土師器　短頸壷	(12.6)	–	–	ナデ	ハケメ	10YR 8/3 浅黄橙	10YR 8/3 浅黄橙	雲母、石英、長石、赤色粒子　やや精良	やや良	口縁部
11	東播系須恵器　捏ね鉢	–	–	(6.8)	–	–	N 灰白	N 灰白	石英、長石　やや精良	良好	底部　回転糸きり
12	瓦質土器　擂り鉢	(27.0)	–	–	ナデ	指押さえ / ナデ	2.5Y 6/1 黄灰	2.5Y 6/1 黄灰	雲母、石英、長石　砂粒多	不良	口縁部
13	瓦質土器　擂り鉢	–	–	–	ナデ	指押さえ / ナデ	10YR 5/1 褐灰	10YR 5/1 褐灰	雲母、石英、長石　砂粒多	不良	体部
14	龍泉窯系青磁　鎬連弁文椀	–	–	–	–	–	10YR 6/2 オリーブ灰	10YR 6/2 オリーブ灰		良好	口縁部
15	明染　皿	–	–	–	–	–	5GY 8/1 灰白	2.5GY 7/1 明オリーブ灰		良好	口縁部
16	瓦質土器　擂り鉢	(44.6)	–	–	ナデ / ヨコナデ	ナデ / ヨコナデ	5GY 8/1 灰白	2.5GY 7/1 明オリーブ灰	石英、長石　精良	良好	口縁部

17 はほぼ完形の土錘である。Ⅲ層出土。18 は小型の黒曜石製石匙である。Ⅲ層出土。表裏から剥離を行い成形している。19 は鉄製の煙管雁首である。Ⅰ層出土。



第 13 図　中田遺跡出土 土製品・石器・金属器
実測図（S ＝ 1/2）

写真８　中田遺跡Ⅲ層出土 土製品・石器
・金属器

第６表　中田遺跡出土 土製品・石器・金属器観察表

番号	器種	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
			mm			g		
18	石匙	Ⅲ層	21	32	4	1.98	黒曜石	

番号	器種	層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
			mm			g		
19	煙管　雁首	Ⅰ層	16	17			鉄	孔　直径 :1.6cm

写真９　中田遺跡Ⅲ層遺物出土状況１

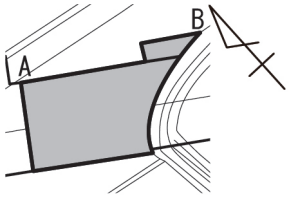
写真 10　中田遺跡Ⅲ層遺物出土状況２

Ⅴ　専岩遺跡

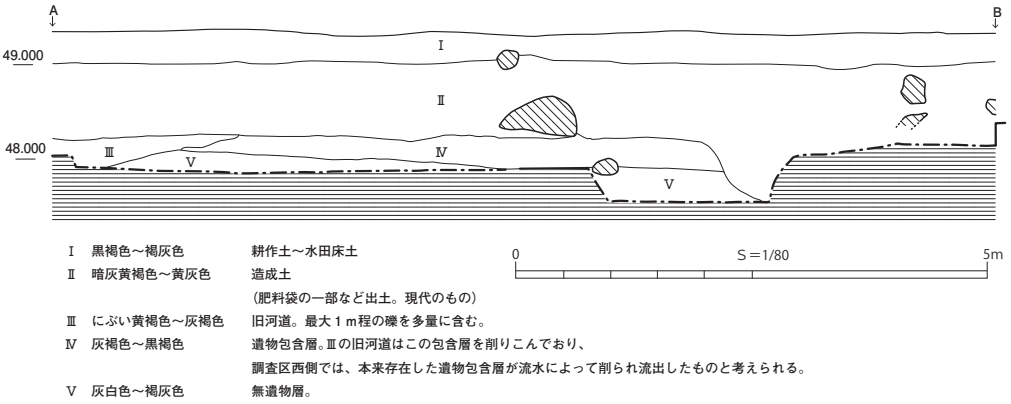
1　調査の概要

(1) 基本層序

専岩遺跡におけるⅠ層は、黒褐色から褐灰色を呈する耕作土・水田床土であり、重機による掘削を行った。Ⅱ層は、暗灰黄褐色から黄灰色を呈する造成土で、農業用肥料の袋などが混入しており、現代の層である。Ⅲ層はにぶい黄褐色から灰褐色を呈する。調査区の西側３分の２程で確認された。最大で直径100cm程の礫を多量に含む。調査区南壁の土層を確認した際に、粗砂～細砂を主体とする層が見られたことと、流路の立ち上がりと見られる傾斜が確認されたことから旧河道であると判断した。Ⅳ層は、灰褐色から黒褐色を呈する層で、調査区の東側約３分の１の範囲で確認した。弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が出土する遺物包含層である。前述のⅢ層の旧河道はこの包含層を削り込んでおり、調査区西側では本来残存していた遺物包含層が水の流れにより流失しているものと考えられる。Ⅴ層は灰白色から褐灰色を呈する無遺物層である。黒褐色の層も一部確認されたが、土壌化の度合いが弱く細砂を混入することから、本明川の氾濫によって供給された自然堆積層であると思われる。遺構は検出されなかった。



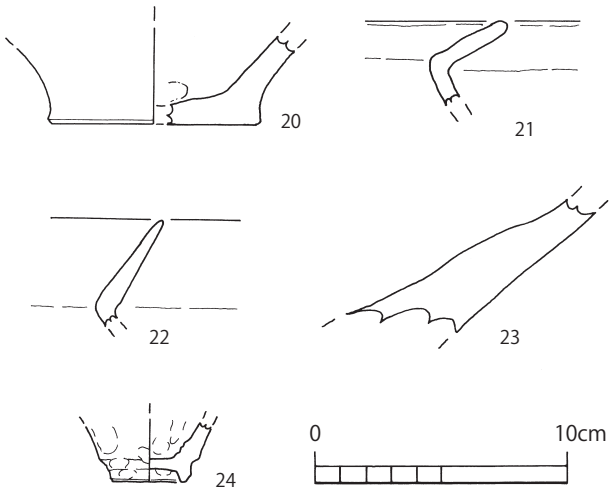
第14図　土層図位置図



第15図　専岩遺跡土層断面図（S＝1/80）

(2) 包含層出土遺物

遺物は全てⅣ層から出土した。**1**は弥生時代中期の甕底部である。内底に指頭痕が残るが、体部内外面は平滑なナデによる調整が行われている。**2**は弥生後期の甕口縁部である。**3**は古墳時代の土師器甕口縁部である。**4**は古墳時代の高杯杯部である。大型の製品で脚部との接合部で欠損している。摩滅大。**5**は手捏ねによるミニチュア土器である。高台を作り出し、内外面には指頭痕が残る。古代～中世のものと思われる。**6**は鋸歯状の刃部を持つ石鏃である。先端と左脚を欠損する。**7**も石鏃である。表裏からの剥離により成形しているが、両面に自然面を残し剥離も浅く、粗雑な作りである。



第 16 図　専岩遺跡Ⅳ層出土 土器実測図（S=1/3）

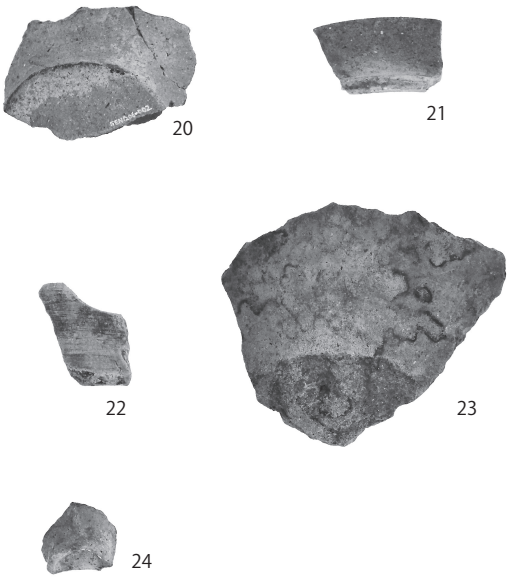
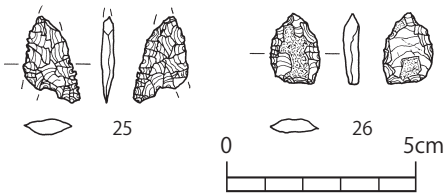


写真 11　専岩遺跡Ⅳ層出土 土器

第７表　専岩遺跡Ⅳ層出土 土器観察表

番号	器種	法量(cm)(　)は復元			調整		色調		胎土	焼成	備考
		口径	器高	底径	内面	外面	内面	外面			
20	弥生　甕	－	－	(8.4)	指頭痕／ナデ	ナデ	2.5Y 6/8 明黄褐	10YR 5/8 黄褐	雲母、角閃石、石英、長石　やや精良	良好	底部
21	弥生　甕	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR 5/3 にぶい黄褐	10YR 7/6 明黄褐	石英、長石　やや精良	良好	口縁部
22	土師器　甕	－	－	－	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR 7/4 にぶい黄褐	5YR 6/6 橙	石英、長石　やや精良	良好	口縁部
23	土師器　高坏	－	－	－	ナデ	ナデ	7.5YR 7/8 黄橙	5YR 6/8 橙	雲母、角閃石、石英　砂粒混	良好	坏部
24	手捏ね土器	－	－	(2.8)	指頭痕／ナデ	指頭痕／ナデ	10YR 6/8 明黄褐	10YR 6/8 明黄褐	角閃石、石英、長石　やや精良	良好	底部～体部



第 17 図　専岩遺跡Ⅳ層出土 石器実測図（S=1/2）

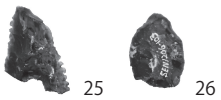


写真 12　専岩遺跡Ⅳ層出土 石器

第８表　専岩遺跡Ⅳ層出土 石器観察表

番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
		mm			g		
25	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.91	黒曜石	鋸歯
26	石鏃	19	13	4	1	黒曜石	

Ⅵ　まとめ

中田遺跡では、調査区東半において、地山に近いほぼ標高 49.4 ～ 49.6m 付近で遺物が分布する状況が確認された。中田遺跡の地山は西から東に傾斜しており、遺物はその標高の低い側に集中する。遺物は弥生時代後期から古墳時代のものが主体であり、摩滅の度合いも弱い。このことから、調査区の近隣に当該期の集落が存在していたものと考えられる。また、中世の遺物である瓦質の火鉢や明代の染付け皿は尾和谷城と関係があるものと思われるが、数は少なく尾和谷城にかかわる人々の生活跡は離れた場所にあるものと思われる。

専岩遺跡では、調査区の東側で包含層を確認したものの、それを切り込む形で旧河道が流れ包含層の多くを流失していることが分かった。包含層の年代としては、出土遺物を見ると弥生時代中期から弥生時代後期のものであると考えられる。旧河道も近世以降のものと考えられ、昭和 32（1957）年の諫早大水害の際の氾濫によって形成されたものである可能性が高い。

なお、いずれの遺跡の調査においても遺構の検出は見られず、遺跡の端部にあたる可能性も考えられる。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかだいせき・せんごしいせき
	中田遺跡・専岩遺跡
副 書 名	九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	Ⅰ
シ リ ー ズ 名	新幹線文化財調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第１集
編 著 者 名	田島陽子・川畑敏則・古門雅高
編 集 機 関	長崎県教育委員会
所 在 地	〒 850－8570　長崎県長崎市江戸町２番 13 号　TEL095－824－1111
発 行 年 月	西暦 2017 年２月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかだいせき 中田遺跡	ながさきけん 長崎県 いさはやし 諫早市 しもおおわたのまち 下大渡野町	42204	245	32° 52′ 56″	130° 01′ 19″	20120723 ～ 20120831	88	鉄道建設
せんごしいせき 専岩遺跡	ながさきけん 長崎県 いさはやし 諫早市 しもおおわたのまち 下大渡野町	42204	246	32° 52′ 49″	130° 01′ 23″	20120723 ～ 20120831	202	鉄道建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中田遺跡	遺物包含地	・縄文 ・弥生 ・古墳 ・中世	・弥生後～古墳前の遺物包含層	・弥生土器 ・土師器 ・瓦質土器 ・貿易陶磁器 ・石匙	特になし
専岩遺跡	遺物包含地	・縄文 ・弥生	・旧河道 ・弥生時代中～古墳時代の包含層	・弥生土器 ・土師器 ・石鏃	

新幹線文化財調査事務所調査報告書　第１集
九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅰ

中田遺跡・専岩遺跡

平成29(2017)年２月発行

発行者　長崎県教育委員会

〒850-8570 長崎市江戸町２番13号
TEL ０９５－８２４－１１１１

印刷所　第一印刷株式会社
〒856-0820 長崎県大村市協和町774番地１
TEL ０９５７－５３－５１１１